



SAMMILUNG
HAUSMUSIK

家庭音樂全集

第十一卷

House

KINDERLIEDER. II.

童謠唱歌集 (II)

春秋社版



故郷の廢家

犬童球溪作歌

Moderato

い く と せ ふ る さ と き て み れ ば
む か し を か た る か そ よ ぐ か せ

さ く は な な く と り そ よ ぐ か せ
む か し を う つ す か す め る み つ

大童球溪作歌

あ
れ
た
る
さ
び
し
き

わ
が
い
へ
に
ふ
る
さ
と
や

す
む
ひ
と
さ
び
し
き

た
え
て
な
く
わ
が
い
へ
や

か
ど
べ
の
を
が
は
の
さ
さ
や
き
も
あ
さ
ゆ
ふ
か
た
み
に
て
を
と
り
て

な
れ
に
し
む
か
し
に
か
わ
ら
ね
ど
あ
そ
び
し
と
も
び
と
い
ま
い
づ
こ

あ
れ
た
る
さ
び
し
き

わ
が
い
へ
に
ふ
る
さ
と
や

す
む
ひ
と
さ
び
し
き

た
え
て
な
く
わ
が
い
へ
や

禮ゆすつて
 むつくと起きて
 こちらを向いて
 人をばにらむ
 おきあがりこぼしは
 をかしいな。
35. “桃太郎”
 桃太郎さん桃太郎さん
 お腰につけた黍團子
 一つわたしに下さいな
 やりませうやりませう
 これから鬼の征伐に
 ついてゆくならやりませう
 行きませう行きませう
 あなたについて何處までも
 家來になつて行きませう。
 そりやすすめそりやすすめ
 一度に攻めて攻めやぶり
 つぶしてしまへ鬼が島
 おもしろいおもしろい
 のこらす鬼を攻めふせて
 分捕物をえんやらや
 萬々歳萬々歳
 お伴の犬や猿雉子は
 いさんで車をえんやらや
36. “月”
 出た出た月が
 圓い圓いまんまるい
 盆のやうな月が
 隠れた雲に
 黒い黒いまつくり
 墨のやうな雲に
 また出た月が
 圓い圓いまんまるい
 盆のやうな月が
37. “美しき天然”
 空に轉ぶる鳥の聲
 峰より落つる瀧の音
 大波小波だうだうと
 響き絶えせぬ海の音
 きけや人人面白き
 此の天然の音楽を、
 調べ自在に弾き給ふ
 神の御手の尊しや。
 春は櫻のあやにしき
 秋は紅葉の唐錦
 夏は涼しき月の絹
 冬はましるき雪の布
 見よや人人美しき
 この天然の織物を。
 いともたくみに織り給ふ

神の御手の美しや。
No. 38. “箱根八里”
 1. (昔の箱根)
 箱根の山は天下の險
 函谷關も物ならず
 萬丈の山千仞の谷
 前に聳え後にさゝふ
 雲は山をめくり霧は谷をとぎす
 晝猶闇き杉の並木羊腸の小徑は苔滑か
 一夫關に當るや萬夫も開くなし
 天下に旅する剛毅の武士
 大刀腰に足駄がけ八里の岩ね踏み鳴す
 斯くこそありしが往時の武士
 2. (今の箱根)
 箱根の山は天下の險
 蜀の棧道數ならず
 萬丈の山千仞の谷
 前に聳え後にさゝふ
 雲は山をめくり霧は谷をとぎす
 晝猶闇き杉の並木羊腸の小徑は苔滑か
 一夫關に當るや萬夫も開くなし
 山野に狩する剛毅の健兒
 獵銃肩に草鞋がけ八里の岩ね踏み破る
 斯くこそあるなれ當時の健兒。
No. 39. “荒城の月”
 1. 春高樓の花の宴
 めぐる盃かげさして
 千代の松が枝わけいでし
 むかしの光いまいづこ
 2. 秋陣營の霜の色
 鳴きゆく雁の數見せて
 植うるつるぎに照りそひし
 むかしの光いまいづこ
 3. 今荒城のよはの月
 替らぬ光たがためぞ
 垣に残るはたゞかつら
 松に歌ふはたゞあらし
 4. 天上影は替らねど
 榮枯は移る世の姿
 寫さんとてか今もなほ
 嗚呼荒城のよはの月。
 =VII. 日本教育的唱歌, 2 (外國曲)=
 こゝに集められた9曲は日本で教育的唱歌
 として愛用されてゐるものですが、元來は外
 國曲のもので、その中で、No. 40はスコッ
 トランド民謡曲 (No. 1.0参照), No. 41はド
 イツ民謡曲, No. 42はスコットランド民謡曲
 (No. 138参照), No. 43もスコットランド民
 謡曲 (No. 130参照), No. 44とNo. 45とは
 アメリカ曲, No. 46とNo. 47とはイタリア

曲, No. 48はドイツ曲です。是等に就いては
 私の“日本唱歌史”を御覽下さい。
No. 40. “螢の光”
 1. 螢の光 まどのゆき
 文よむ月日 重ねつつ
 いつしか年も すぎの戸を
 あけてぞ今朝は わかれゆく。
 2. とまるもゆくも かざりとて
 かたみに思ふ ちよろづの
 こころのはしを ひとつごとに
 さきくとばかり うたふなり。
 3. つくしのきはみ みちのをく
 うみやまとほく へだつとも
 その真心は へだてなく
 ひとつにつくせ 國のため。
 4. 千嶋の奥も おきなほも
 八洲のうちの 守りなり
 いたらん國に いさをしく
 つとめよわがせ つつがなく。
No. 41. “霞か雲か”
 1. かすみか雲かはたゆきか
 とばかりにほふその花ざかり
 ももとりさへもうたふなり。
 2. かすみは花をへだつれど
 へだてぬ友ときてみるばかり
 うれしき事は世にもなし。
 3. かすみでそれとみえねども
 なく驚にさそはれつつも
 いつしか來ぬのはなのかげ。
No. 42. “故郷の空”
 1. 夕空晴れて秋風吹き
 月影落ちて鈴蟲なく。
 思へば遠し故郷の空。
 ああわが父母いかにおはす。
 2. 澄み行く水に秋來れり、
 玉なす露はすすきにみつ、
 思へば似たり故郷の空。
 ああわが同胞たれと遊ぶ。
No. 43. “才女”
 1. かきながせる筆のあやに
 染めし紫世あせず、
 ゆかりの色ことばの花
 たぐひもあらじその績。
 2. まきあげたる小籠のひまに
 君の心もしら雪や、
 盧山の峰遺愛の鐘
 目に見るごときその風情。
No. 44. “旅愁”
 1. 更け行く秋の夜
 旅の空の、
 わびしき想ひに

ひとりなやむ。
 戀しや故郷
 なつかし父母。
 夢路にたどるは
 故郷の家路。
 更け行く秋の夜
 旅の空の、
 わびしき思ひに
 ひとりなやむ。
 2. 窓うつ嵐に
 夢もやぶれ、
 はるけき彼方に
 心まよふ。
 戀しやふるさと
 懐し父母
 思ひに浮ぶは
 杜の木すゑ。
 窓うつ嵐に
 夢もやぶれ、
 はるけき彼方に
 心はこぶ。
No. 45. “故郷の廢家”
 1. 幾年ふるさと 來て見れば、
 咲く花鳴く鳥 そよぐ風。
 門邊の小川の ささやきも
 なれにし昔に 變らねど、
 荒れたる我家に 住む人たえてなく。
 2. 昔をかたるか そよぐ風
 昔をうつすか すめる水。
 朝夕かたみに 手をととりて
 遊びし友人 今何處。
 淋しき故郷や さびしき我家や。
No. 46. “祝歌”
 萬歳 萬歳 萬歳
 山邊も野邊も 霞わたり、
 花笑ひ 鳥歌ふ。
 君が代の 春の日に
 桂を折りえし 我友のその光榮、
 思へばその身の 光榮のみか
 御代の光 御國の榮
 花も鳥も 祝へや祝へ。
 あ……萬々歳。
No. 47. “湖上の月”
 1. 月かげさやけく
 風も吹かぬ秋の夜半
 眞澄の鏡か
 ちりもおかぬ湖
 いざ我が友
 小舟いだせ
 いざ我が友
 とも綱とけや

413

家庭音樂全集		第十一卷
編纂者	神田龍一	
發行者	神田龍一	
發行所	春秋社	
發賣所	松柏館書店	
	東京市日本橋區吳服橋 振替東京 39716	
印刷所	三京社	
	東京市澁川區上中里四〇〇	
昭和十年四月十日印刷		(定價)三圓五拾錢
昭和十年四月十五日發行		